

結社誌を訪ねて

中原 修子

なのかもしれないと考えています。いろいろなことを自由に連想させてくれる作品に出会えました。

われを焼く炎かくあれ大庭燎

宮崎 洋

「春燈」四月号

リア王の台詞思へり冬至風呂

鈴木多江子

「雲取」三・四月号

柚子を浮かべた冬至風呂でゆったり疲れを取りながら、作者の心に思い浮かんだものはシェークスピアの描いた四代悲劇の一つ「リア王」の一節です。四百年以上も前に描かれた悲劇の台詞という所がとても粹で知的です。風の吹き荒ぶ寂しい音が悲しいリア王の嘆きの言葉のように響いています。英国の老王リアは、三人の娘の内が一番孝行な者に領地を与えることにし、甘言を弄した長女と次女に領地を与え、素直な三女を追放してしまいます。その後、リア王は上の二人の娘に裏切られ、失明し流浪の身へ転落します。追放された三女はフランスを助け王妃となり、リア王を救おうと試みますが、敗けて殺されてしまい、リア王は三女の遺体を抱きながら狂乱し息を引き取ります。「リア王」には様々な有名な台詞があります。「生れ落ちたときに泣くのは、この阿呆の檜舞台に引き出されたのが悲しいからだ。」「無からは無しか出てこない。」「どんな底などではない。自分から『これがどんな底だ』と言っている限りは。」等々ですが、多江子氏が心に浮かんだ台詞は「わしは目が見えていた時には、つまづいていた。」

火に関連した語が三つも含まれる強い語調の連なりに、ややたじろぐ、衝撃性のある作品です。宮崎氏は自分を奮い立たせる意味として炎を捉えておられるのか、あるいは人生の最期の火葬の火と捉えておられるのか判断に迷いました。しかし、たとえ氏がご自身の終焉を見つめられているとしても、何か勁いものが昇華した後も残る、と感じられる作品です。一般に「庭燎」は「ていりょう」と読み、特に宮中で神楽の時に焚く篝火です。しかし、インターネットで調べると、関東の奇祭の一つの「谷保天満宮大庭燎」が真っ先に現れ、こちらの方が作品にぴったります。この祭りの炎は「おかがら火」とも言われ、境内で厄を払う神事の火です。本社拝殿に高さ三メートルの二基の薪の山を積み、夕方一斉に点火します。炎はたちまち広がり火の爆ぜる音と熱風が広がるそうです。夜空に高く立ち上る炎に向かい、作者は「我を焼け、我はそこから不死鳥のように立ち上る。」と叫んでいるように見受けられます。確固たる自信と信念を秘めた作品で、見事です。

元朝の鈴鳴る毎の祈りかな

佐合たけし

「圓座」四月号

一見し、すぐ作品の表す光景が立ち上がります。若水を汲み、屠蘇や雑煮で新年を祝い、その後は初詣というのが一般的な日本

人の過ごし方です。「元朝」という二文字で元日の厳かな朝という事が伝わり、適切な美しい季語を用いられておられます。お賽銭を投げ、本坪鈴の緒を引いて鳴らし、柏手を打ち、心の中で大きな声で名乗りを上げ、願いを神に告げます。ここまでは誰もがする一連の作法ですが、この作品の素晴らしいところは、作者が参拝を済ませた後も、他の人々の祈る様子をじっと静かに見つめておられる点です。鈴音の一つ一つが鳴る度毎にその人その人の願いがあり、日本人の真摯な年明けの儀式を大切なものとして温かな眼差しで見えておられることが掲句から読み取れます。敬虔な心持が読み取れる、新年に相応しい作品だと考えます。

憚へ起きる寒夜の常夜灯

吉岡 桂子

「駒草」四月号

若い時はそうでなくても、年を取ると暗闇がよく見えないことがあります。手すりが増え、足元に常夜灯が点るようになります。真つ暗な廊下を、仄暗い明かりが、誘導してくれます。筋肉が弱り転びやすくなるため、安全に洗面所のありかを伝えてくれる常夜灯は欠かせないものです。作者は夜も更けて寝静まった廊下を常夜灯を頼りに進んで行きます。常夜灯の橙色のくすんだ色合いと白い息が静かに付きまといます。また、この作品の「憚」という言葉について少し考えました。「憚」という語を理解できる人はよい年齢の人か、大学受験生ぐらいではないかと考えています。最近の若者に、「下駄箱」「筆箱」と言っても通じない時があります。確かに下駄も筆もほとんど使わない生活なので当たり前で

す。「靴箱」「ペンケース」という語が取って代わり、「はばかり」と言っても意味が分からないため、怪訝な顔をされてしまうのが落ちです。しかし、「厠」や「雪隠」のような言葉は使わなくても、「憚」という控えめな日本語は生き残って欲しいと考えています。

お伽の国のやうな風景シモバシラ

堀部 嘉雄

「暖響」三月号

この作品から、数年前に一世を風靡したディズニー映画の「アナと雪の女王」を思い浮かべました。大きな三センチくらいに伸びた霜柱をしゃがんで真横から見ると、透明な小さな柱が沢山立ち並ぶ氷の宮殿のようです。「ありのままの姿でいたい」と全てを氷に変える力を持っていることを隠さない女王の白い城のようなのです。下五の「シモバシラ」の文字をご覧になり、そのカタカナ表記を平仮名にしたいと思われる方もおられるかもしれません。しかし、霜柱の持つ透明性や脆さを考えるとここは「シモバシラ」が正解だと考えます。霜柱を作る「水」というものは実に不思議な物質です。液体から固体になる時、普通の物質は表面積も体積も小さくなります。しかし、液体の水は違います。地中の水分は冷えて氷になると体積はみるみる増加します。寒ければ寒いほど水はどんどん膨らみ地面を盛り上げていきます。土を押しつけて盛りあがった霜柱の中には、王子や王女や不思議な魔力を持ったものがいて、様々な物語を紡いでいるのかもしれない。

(筆者住所

〒310-0853

茨城県水戸市平須町一八二八―五七二)